

伝説の下宿人 Tさん登場

なずくさまも、可憐(かれん)でした。

二〇〇〇年の暮れも押し迫った十二月十七日。NPO法人「花風」が誕生しました。翌年五月には、訪問介護と居宅介護支援の指定を受け、いよいよ「居酒屋」活動中心の「花風」も公的介護事業に参入となりました。

「花風」も公的介護事業に参入となりました。と言っても、利用する人がどんどん現れるわけでもなく、相変わらず生ぬるいとも言える日々を送っていました。

そんな日々が一転したのは、その年の十月二十四日でした。私は、その前日に地域の在宅介護支援センターのケアマネから「高齢者世帯の七十八歳の女性Tさんを八日間預かってもらいたい」という依頼を受けていました。十一月一日にはグルーブホームに入居するので、それまでの一時滞在ということでした。保険外のショートステイサービスの看板も掲げていましたので、「八日間くらいなら大丈夫ですよ」と引き受けました。

ボランティアの女性と共に見が家に現れたTさんは、小柄で色白目もクリクリとしたかわいらしいと形容できる方でした。「今月末までここで暮らすんだよ」というボランティアの言葉にニッコリう

ところが、夕方になって穏やかだったTさんの様子が豹変(ひょうへん)しました。ベツドからむっくり起きあがったと思うと、突然大声で叫んだのです。

「ここから出て行ってちょうだい！」と、突然大声で叫んだのです。「Tさんどうしたんですか？」

「私の家から出て行ってちょうだい！」



NPO法人在宅生活支援
サービスホーム花風

木村美和子理事長

花風屋繁盛記

連載 4

人と人がつながって

よ

「すみません」と答えて、一件落着。

夜になると、Tさんはさらに落ち着きをなくしました。室内を歩き回り、

脱ぎ、眠ろうとする気配がありません。とうとう、空が白むころまで

眠ってくれませんでした。そんな毎日が七日間続きました。「もう結構でございますが、その時の気持ちです。初めてお会いした時、「短期間でもしっか

り向かい合って、家族のように暮らそう」と思った気持ちはどこかへ行ってしまう。「そんなTさんがここにいたいんだって、木村さんをお願いしようね。グルーブホームの方は断るから、

「花風下宿」誕生

です。十一月一日の終了日は待ち遠しく、嬉(うれ)しい日でした。ところが、迎えにきたボランティアのIさんに、Tさんはこう言いました。「ここは私の家なんだ

「ここは私の家なんだ」と言いました。Tさんは「ここは私の家なんだ」と言いました。Tさんは「ここは私の家なんだ」と言いました。



イラスト・木村玲

「ここは私の家なんだ」と言いました。

思い描いた下宿と現実

私の構想では漠然とではありましたが、さまざま準備を重ねて「五年後に下宿をつくる」と考えているが、図らずも誕生したのと同じように思っていたのでした。